

巻頭言

千葉喜彦

日本時間生物学会会長

わが国の時間生物学界は新しい段階に入った。時間生物学の専門家が育ち、そのなかから、概日リズムに関する経験則を十分に理解したうえでの優れた研究が生まれるようになってきた。それだけではない。無視できないのは、その人たちが研究機関の中で相当の地位を占めるようになったことである。日本時間生物学会は、このような流れのなかで必然的に生まれたといていい。本格的な時間生物学の時代がおとづれたといえる。

この流れはある意味では日本的であった。周期性とくに概リズムは、生命の維持に本質的な役割を果たすものであり、その研究には、基礎、応用両面からみて大きな意義がある。このことを多くの生命学者が認識していたにもかかわらず、時間生物学の発展にもどかしい感じがあったのは、ひとつには、研究者が年功序列的に相応の年齢に達するまではふさわしい地位につけずにいたという状況があったためであろう。われわれの多くは、新しい分野が日本に定着するときの問題点を実際に体験したことになる。この体験を無にしてはならない。

学術大会に二年つづけて実に多くの出席者があったことは、大会会長をはじめ地元の会員の努力の賜物であるが、同時に、時間生物学に対する関心が想像以上に醸成されていたことを物語っていると思う。会員の所属は多岐にわたっている。また地位や研究条件もさまざまである。当然のことながら、この学会は研究成果をもちよって、学問的な交流を自由に深く行う場所であるべきであろうし、また、所属機関などの壁をこえて、研究組織などのあるべき姿を追求する場所にもなることが望ましい。

時間生物学は、いろいろな意味で学際性の強い分野である。私は、この認識の上に立って、学会が包容力のあるものとして発展することを、本誌第一巻、第一号の巻頭言で希望した。学際性と同時に国際性を高めることも、この学会の重要な課題である。世界的にみると、すでに幾つかの国や地域に時間生物学に関心をもつ研究者の組織があり、国内的なあるいは国際的な活動を行っている。日本時間生物学会は、このような情勢に対しても包容力を発揮し、すべての組織とできる限り等距離の協調関係をつくりあげていくべきであろう。